少子化対策ではなく人口政策の確立を

加瀬英明（外交評論家）

年間出生数が百万人を割つた

多くの識者が少子化によつて、日本が衰退してゆくことを憂いてゐる。これまでは年間出生数が二百万人台だつたのが、九十万人台を割つてしまふことになるとみられる。

この三十年ほどか、日本の都会に住んでゐると、誰もがかつての王侯貴族のやうな生活を営んでゐる。贅を極めてゐるのに、贅に恥つてゐるのに気付かないほどの贅沢はない。スマホを使つて世界中の料理が自宅に届く。タクシーを拾つて、運転手に行き先をいへばよい。指先一つで家電を動かせる。テレビによつて、バラエティー・ニュース・ショーをはじめ、居間で滑稽劇を楽しむことができる。

身の回りにあらゆるサービスがある。サービス（service）の語源は、ヨーロッパ諸語のもとのラテン語で、「奴隷」を意味する「セルヴス（servus）」だ。大勢の奴隷にかしづかれてゐるのだ。それなのに、国民は不満でいっぱいだ。狂言『節分』に「えっ、この罰当りめが」といふ台詞があるが、これほど恵まれた生活をしてゐるのに、さう思はない。

物質的豊かさが少子化の原因

亡国を免れるためには、子を産む女性や子育てを望む若い夫婦に、国が補助金を支給すべきだ、金をぶつければ出生率があがると、説く人々がゐる。だが、私は社会が豊かになるにしたがつて出生率が減つてきたのに、金で解決できるといふのは理解できない。経済成長による物質的な豊かさこそが、少子化の惨状をもたらしたのではないか。

スウェーデンやフランスが、子を産むシングル・マザーや夫婦に、児童手当や住宅・教育費など給付を増やすことによつて出生率が向上したと喧伝されるが、その後、出生率が低下してゐる。

いまでは工業ロボットやAIが、私たちの生活を支へてゐる。テクノロジーが私たちの生活を、大きく変へてゐる。

このところ先進諸国は、どの国も「人手不足」の悲鳴をあげてゐる。アメリカでは失業率が半世紀ぶりに三・六％まで落ちてゐる。イギリス、ドイツ、フランスなどの諸国でも求人難が深刻だ。日本でも十年前の平成十一年に失業率が五・〇九％だつたのが、二・四％まで落ちてゐる。技術革命によるもので、政府の施策がもたらしたものでない。

ハイ・テクノロジーと金と数字が私たちを支配するやうになつてゐる。金は空腹などその場を凌ぐために使はれる。人と人との絆が金によつて結ばれてゐるか ら、短時間で使ひ捨てにされる。男女の結びつきも例外ではない。テクノロジーも数字も理によつてつくられてゐるから、心も情もないのだが、心は生きてゐるか ら、金とテクノロジーと数字だけになると、家族も家族的経営も崩壊して、人々が神経症を患つて、子殺しや親殺しに走る者が急増する。

私は「少子化対策」といふ言葉が気に入らない。なぜ、「人口政策」といはないのか。

対米戦争が始まつた昭和十六（一九四一）年に、政府が国の将来を想ひ量つて「人口政策確立要綱」を決定した。戦後、日本が国であるべきでないと信じるやうになつたために、かつての「産めよ増やせよ」といふ言葉を連想させるといつて、「人口政策」といふ言葉が抹消された。

私は平成六（一九九四）年に、厚生省（現厚労省）が「少子化」対策として、子育て支援などの「エンゼルプラン」を発表した時に、意味不明な「エンゼル」といふ言葉を使つたことに憤つたのを覚えてゐる。英語の天使「エンジェル」だつたのか。外国に魂を売つた小っ端役人が造語したにちがひない。

数年前に、友人と小料理屋で浅酌した時に、友人が「手鍋提げても」といつたところ、若い女子従業員が「手鍋って、どんな料理ですか？」と質問したので、呆れたことがあつた。もちろん、好きな男と夫婦になれるなら、どんな貧困もいとはないといふ意味だ。

男女共同参画法が少子化を悪化

政府が一九九〇年代に〝フェミニズム運動〟を煽つて、「男女共同参画社会」を推進したことも、少子化を悪化させた。女性は家庭を築くことが何より大切な役割であるのに、家族を否定することをはかつたものだつた。

あはせて軽佻浮薄な言葉狩りが進められて、「婦」は女性が帚をかかへてゐるから差別だといつて、警察庁が「婦人警察官」を「女性警察官」、防衛省が「婦人自衛官」を「女性自衛官」と改称した。私は、母親が座敷や家の前の路地を掃くのを見て、帚が母の心の延長だと信じてゐたから、母が冒涜されたと思つた。

私は松下政経塾の役員を永年勤めたから、さういふべきではないが、家電製品はすべて心を省くものだ。

警察や自衛隊では、「婦道、婦徳」といふ言葉を使ふことを禁じてゐるにちがひない。だが、いまでも「妊婦」といふ言葉が使はれてゐる。どちらかにしてほしい。「家族」もウ冠の下に豕と書くから、差別語ではないか。

女性の高学歴化が結婚年齢を引き上げ、子供の教育費がかかりすぎることが、子を産む意欲を減退させているといふ。学歴崇拝が日本を滅ぼす。高収入を望んで、自分をひたすら他に委ねて、合はせる受験戦争が、幼稚園から就職まで続く。

二宮尊徳、伊能忠敬、渋沢栄一の三人をあげれば、農家の子だつたから、最終学歴は寺子屋の四年ばかりだが、まづ自分で自分を創つたうえで、日本を創つた。虚ろな教育に国費を浪費するべきでない。

個人が何よりも尊重される。だが、「個人」といふ醜い言葉は、明治に入るまで日本語のなかに存在しなかつた明治翻訳語だ。私たちは人と人との絆のなかで生きてきた。

どうしたら、少子化を防ぐことができるのだらうか。

愛国心を鼓吹するほかない。

令和元年8月号（266号）
（皇紀2679年）　毎月1日発行

新風

編集人　瀬戸　開
発行人　魚谷哲央
年間購読料＝2,000円

維新政党・新風本部
〒604-0934 京都市中京区麸屋町通二条下ル
第2ふじビル4階
TEL.075-708-3700 FAX.075-708-3800
https://shimpu.jpn.org/
otayori@shimpu.jpn.org

新風驟雨

▼安倍晋三首相は靖国神社参拝を忘れたのか。最近は閣僚も参拝してゐない。英霊、御遺族は悲しんでをられるに違ひない。▼参拝するのには今が良い時ではないか。支那は米国との貿易戦争でわが国に擦り寄り、韓国との関係も落ちるところまで落ち、気を遣ふこともなくなつたので今こそ参拝すべきである。▼更にトランプ大統領と一緒に参拝したら、抗議するのも諦めるだらう。本当は情けない話ではあるが。▼他にも憲法改正・北朝鮮拉致犯罪・北方領土問題そして靖国神社参拝と、全て公約不履行の〝するする〟詐欺ではないか。安倍首相ならいつかやつてくれるだらうと思つてゐる自民党支持者よ、目を覚ませ。▼国民がこれらの問題に無関心なのが一番の問題である。先月の参議院選挙でも有権者の大多数の関心事は社会保障で、今の国際情勢ではいつ戦争が起きても不思議ではなく、侵略されたら社会保障どころではなくなるのだが。事が起きなければ目が覚めないのか。国民を覚醒させるためにも維新政党・新風が頑張らなくてはならない。

（丸）

本紙目次

一頁…
●少子化対策ではなく人口政策の確立を
二頁…
●党声明　他